

《資料紹介》

広島県立歴史民俗資料館が所蔵する赤羽刀について

－室町時代末期の末三原派の作品を中心に－

三 上 高 慶（孝 徳） ・ 島 田 朋 之

- | | |
|-----------|------------------------|
| 1 はじめに | 5 当館所蔵品の紹介 |
| 2 日本刀について | 6 考察 室町時代末期の三原派の特徴について |
| 3 赤羽刀について | 7 おわりに |
| 4 三原刀について | |

【要約】

平成 7 年（1995）に成立した「接收刀剣類の処理に関する法律」によって、平成 11 年（1999）に室町時代末期の三原刀を中心とした赤羽刀 28 点が、国から当館に譲渡された。

この内の 25 点を令和 6 年 4 月から開催した収蔵資料展で展示公開したが、その際に全日本刀匠会顧問の三上貞直（高慶）刀匠に多くの御指導をいただき、所蔵する 28 点すべてを詳細に観察する機会を得た。

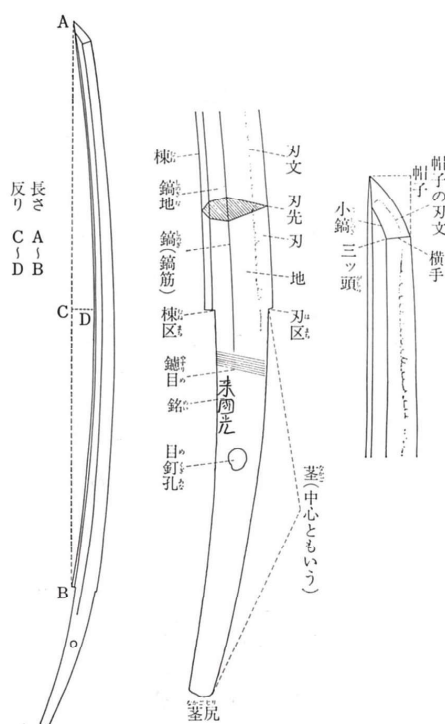
今回は、当館所蔵の赤羽刀 28 点の造り、刃紋、鍛えなどを、観察をもとにまとめ、合わせて三上刀匠の所見を整理した。それをもとに室町時代末期の三原刀について考察を試みる。

1 はじめに

令和 6 年春の収蔵資料展で、当館が所蔵する日本刀の中から「赤羽刀」と呼称される「接收刀剣類」⁽¹⁾を 25 点紹介した。展示に際しては、刀匠の全日本刀匠会顧問三上高慶（孝徳）氏、全日本刀匠会副会長の久保善博氏に御協力をいただき、多くの御指導をいただいた。また準備段階で、所蔵する 28 点を詳細に観察する機会を得た。今回は、その成果をまとめ、室町時代末期の三原刀の特徴について考察を試みる。

2 日本刀について

日本刀は平安時代末期に出現したとされる。硬さの異なる鉄を材料にして、何度も折返して鍛えた刀身と、銘として刀匠の名前や制作年代などが刻まれた茎が一体となって



※参考文献 (1) から転写

いる。多くが反りを持つ湾刀で、刀身の断面は五角形から七角形、茎には目釘孔があり、目釘を通して柄に固定し、刀身は鞘に納められる。刀身を研師が磨き上げることで、刀身に美しい刃文と肌目の鍛えと呼ばれる模様が浮かび上がる。ここまで刀身を美しく仕上げた刀剣は世界的にも稀といわれる。

長さ 60 cm 以上で刃を下に向けて佩くものを「太刀」という。作者の銘は佩いた場合外側になる。古代の直刀は「大刀」と書いて区別する。長さ 60 cm 以上で刃を上に向けて腰に差すものを「刀（打ち刀）」という。室町時代中期頃から主流になる。長さ 30 cm 以上で刃を上に向けて腰に差すものを「脇差」という。江戸時代、刀とセットで使った。長さ 30 cm 以下のものを「短刀」といい、だいたい平造りである。「劔」は両刃で左右対称の造りである。

日本刀の作刀を専門とする鍛冶師を「刀匠」といい、刃部を研磨する職人を「研ぎ師」という。刃部を収める鞘や柄を作る職人を「鞘師」、鍔などを作る職人を「白銀師しろがねし」という。

日本刀剣史略年表 ⁽²⁾

	刀剣史上の区分	主な出来事	刀剣様式の変化	備考
400	古墳			
		538 仏教伝来（日本書記には552）		
600	飛鳥時代	645 大化の改新 663 白村江の戦い 672 壬申の乱	直刀	直刀の隆盛
	奈良			
800		794 平安京遷都 801 坂上田村麻呂蝦夷を攻撃		
	平安時代	939 平将門の乱		
1200	鎌倉時代	1274、1281 蒙古襲来 ～1396 南北朝の戦い 日本刀が輸出され、数打ち物が出回る 1467～1477 応仁の乱 1588 豊臣秀吉刀狩	太刀	腰反りの高い太刀 短刀の隆盛 この頃、「正家」の記録がみられる 打刀の発生 鑄造脇差の発生
1400	室町時代			
1600	安土桃山	1600 関ヶ原の戦い		
	江戸		打刀	
1800	新刀 新々刀	1868 明治維新 1876 廃刀令 1868～1869 戊辰戦争 1938～1945 第二次世界大戦 1945 GHQ「勅令第300号銃刀類所持禁止令」 1995 接收刀剣類の処理に関する法律が成立 2024 赤羽刀と三次人形開催		
2000	現代刀			

3 赤羽刀について

「赤羽刀」という刀鍛冶の流派はない。

昭和 20 年 (1945) 9 月、当時日本を占領していた連合国軍最高司令官総司令部 (G H Q) は、日本の武装解除の一環として全国に刀剣など武器類の提出を命じた (※ 勅令第 300 号「銃砲類所持禁止令」)。接收された一部の刀剣類は、東京都北区赤羽にあったアメリカ陸軍の第八補給廠の倉庫に集められたことから、「赤羽刀」と呼称されるようになった。この他日本各地で接收された刀剣類の多くは海洋に投棄、または溶鉱炉で溶解され、美術的価値の高いものが昭和 22 年 (1947) 日本に返還された。所有者不明の 4,500 点を超える刀剣類は、東京国立博物館の収蔵庫に保管されたままになっていた。平成 7 年 (1995)、「接收刀剣類の処理に関する法律」が成立し、元所有者からの返還請求を受けて、7 点が元所有者やその遺族に返還された。平成 11 年 (1999)、なお国の所有に残ったもののうち 3,209 点が、全国の公立博物館に、適正に保存・管理すること、一般公開することを条件に、無償譲与されることになった。譲与先は、刀との地域的な関係も考慮され、広島県内の各博物館に、地域ゆかりの刀剣類 83 点 (表 1) がそれぞれ譲与されている。

当館には、平成 11 年 (1999) に、28 点の譲渡を受けた。(表 1 1～28)。

内訳は、室町時代末期から江戸時代に、現在の三原から尾道周辺で活躍した三原派の刀 (1～22、24、27)、江戸時代末期に三次周辺で活躍した刀匠の刀 (23、25)、赤羽刀の中でも最大級の刃長となる江戸時代末期に芦田郡府中周辺で制作された刀長 137 cm の刀 (26) や、無名だが青江と伝えられる刀 (28) がある。特に 1～22、24、27 は、室町時代末期の末三原派の作風の特徴を観察する上で良好な資料群である。

表 1 広島県の赤羽刀一覧表 (県内の博物館が譲与を受けた赤羽刀) ⁽³⁾

広島県立歴史民俗資料館

No.	種別	銘文	読み	国名	年代	刃長	反り
1	短刀	正近	まさちか	備後	室町末期	20.8	—
2	短刀	備州三原正光	まさみつ	備後	室町末期	29.6	—
3	短刀	備後三原住正行作/天正十一年八月吉日	まさゆき	備後	室町末期	27.2	0.1
4	脇差	正家	まさいえ	備後	室町末期	38.8	0.5
5	脇差	正清	まさきよ	備後	室町末期	54.8	1.4
6	脇差	備州三原住人正重作	まさしげ	備後	江戸	54.7	1.2
7	脇差	備州三原住貝正近作/永禄二年八月日	まさちか	備後	室町末期	47	0.9
8	脇差	備州三原住正近作	まさちか	備後	室町末期	56.8	1.8
9	脇差	三原住正家	まさいえ	備後	室町末期	36.3	2
10	脇差	備州三原住正直	まさなお	備後	室町末期	40.4	0.8
11	脇差	備州三原住正則/明徳元年八月日	まさのり	備後	室町	35.7	0.8
12	脇差	正広	まさひろ	備後	室町	41.8	0.9
13	脇差	正広	まさひろ	備後	室町	43.6	1
14	脇差	備後国三原住人貝正興作/伊丹重俊延	まさおき	備後	室町末期	44.4	0.9
15	刀	藤原重行	しげゆき	備後	江戸	71.3	1.6

16	刀	正近	まさちか	備後	室町末期	63.6	1.2
17	刀	備州住定光	さだみつ	備後	室町末期	76.6	1.6
18	刀	備後三原住人具正直	まさなお	備後	室町末期	65.2	2
19	刀	備後国三原住人具正興作	まさおき	備後	室町末期	71.4	1.4
20	刀	備州三原住正近作	まさちか	備後	室町末期	70.8	1.8
21	刀	備州三原住人具正近作／大永六年二月日	まさちか	備後	室町末期	66.5	2
22	刀	備州三原住人藤原具正興作／永禄二年八月吉日	まさおき	備後	室町末期	68.8	2.1
23	刀	備後三次住宍戸正広／文久三年七月日作之	さだひろ	備後	江戸末期	69.2	1.6
24	刀	備州尾道住辰房重則作／永正四年八月日	しげのり	備後	室町末期	61.8	1.8
25	刀	備後三次住横山祐秀作／元治二年二月日	すけひで	備後	江戸末期	65	1
26	刀	備之後州芦田郡府中住広瀬隆重作之／嘉永元年戊申八月 吉祥日願主伯州日野郡多里宿川上屋彦次郎	たかしげ	備後	江戸末期	137	4.5
27	刀	備後国三原住平正房作	まさふさ	備後	室町末期	68.6	1.4
28	刀	大磨上 無銘 伝青江		備中	南北朝	74	2.8

福山城博物館所蔵

No.	種別	銘文	読み	国名	年代	刃長	反り
29	刀	正久作	まさひさ	越前	室町末期	68	1.8
30	刀	肥前国河内大掾藤原正広	まさひろ	肥前	江戸	70	1.4
31	脇差	吉則	よしのり	山城	室町	50	1.3
32	脇差	(菊文)越前守源来信吉	のぶよし	山城	江戸	44.6	1.6
33	短刀	越前守正俊	まさとし	山城	桃山	29.2	0.4
34	脇差	出羽大掾藤原国路	くにみち	山城	江戸	45.6	1.1
35	刀	備州国住長船祐定作／大永六年八月吉日	すけさだ	備前	室町末期	67.5	2.1
36	脇差	備州福山住助高	すけたか	備後	江戸	51.3	1.2
37	脇差	出羽大掾藤原国路	くにみち	山城	江戸	49.8	1.3
38	薙刀	大和太掾藤原正則	まさのり	越前	江戸	56.4	3.8
39	刀	大和守源広信	ひろのぶ	山城	江戸	61.9	1.8
40	刀	(菊文)越中守正俊	まさとし	山城	江戸	74.6	2
41	脇差	山城国住藤原信吉	のぶよし	山城	江戸	45.6	0.9
42	刀	無銘			室町	73.4	1.7
43	刀	無銘			室町	72.1	2.3
44	脇差	無銘			室町末期	50.8	1.1
45	脇差	無銘			室町	48	1.2
46	刀	無銘			室町	63.5	1.4
47	刀	無銘			室町末期	62.8	1.6
48	刀	無銘			室町	64.8	1.6
49	刀	無銘			室町	75.4	1.6
50	刀	無銘			室町	69.1	1.4
51	刀	無銘			室町	68.4	1.5

52	刀	無銘			室町	78.8	1.4
53	刀	無銘			室町	61.4	1.5

安芸高田市歴史民俗博物館

No.	種別	銘文	読み	国名	年代	刃長	反り
54	脇差	備州長船清光/永禄二二年二月日	きよみつ	備前	室町末期	48.8	1.4
55	刀	無銘		備後	南北朝	69.1	1.4
56	刀	無銘		備後	室町	69	2.1
57	刀	無銘		備後	南北朝	68.2	2
58	刀	無銘		備後	室町前期	72	2
59	刀	無銘		備後	室町	71.3	1.6
60	刀	無銘			室町末期	69.2	2

しんいち歴史民俗博物館

No.	種別	銘文	読み	国名	年代	刃長	反り
61	刀	無銘		備後	南北朝末期	64.6	2
62	刀	無銘		備後	室町前期	63.1	1.6
63	刀	無銘		備後	室町前期	67	1.6
64	脇差	無銘		備後	室町前期	38	1
65	刀	無銘			室町	69.4	1.4
66	刀	無銘			室町	71.2	1.6
67	脇差	無銘			室町	36.2	0.7
68	刀	無銘			室町を下らず	68.9	1.8
69	刀	無銘			室町	60.2	1.3
70	刀	無銘			室町	70.8	1.2
71	刀	無銘			室町	69.5	1.5
72	刀	無銘			室町	72	2.2
73	刀	無銘			室町	62.8	1.9
74	刀	無銘			室町	66.6	1.2
75	刀	無銘			室町最末期	64.3	1.2

広島市（広島城）所蔵

No.	種別	銘文	読み	国名	年代	刃長	反り
76	太刀	不動明王備陽長船士横山加賀介藤原朝臣祐永／敵島大明神嘉永元年二月日応貞永莊右衛門清道需造之	すけなが	備前	江戸末期	64	2.5
77	刀	芸州住出雲大掾正光六十五歳 以石州邑知鋼鉄冶之鍛之／慶応二年二月日	まさみつ	安芸	江戸末期	71	1.5
78	刀	播磨守藤原輝広作	てるひろ	安芸	江戸	64	1.3
79	短刀	播磨守輝広	てるひろ	安芸	江戸	29.9	0.2
80	脇差	大山住宗重	むねしげ	安芸	江戸	58.5	1.1
81	脇差	播磨守藤原輝広作	てるひろ	安芸	江戸	55.9	1.1
82	脇差	播磨守輝広作	てるひろ	安芸	江戸	49.5	0.7
83	脇差	播磨守藤原輝広	てるひろ	安芸	江戸	46.6	1.2

4 三原刀について

鎌倉時代末期（正和年間頃）頃から、現在の三原から尾道周辺で活躍した刀鍛冶の一派で、三原正家を祖とすると言われる。正家の銘は何代も続いており、名鑑でも9人の名前が挙げられる。江戸時代の「古刀銘尽大全」では、元祖正家を天平（729～48）とし、中興の祖として徳治～正和（1306～12）頃の正家が挙げられているが、通説では徳治頃の正家が初代とされる。正家作の刀は、はじめは下作とされたが、応仁の乱（1467年）以降、卓越した斬れ味で声望を高め、正家の名跡は16世紀末まで300年間近く続いた。15世紀前半の四代正家（左兵衛尉正家）は、最上大業物に位列される日本刀史屈指の名工である。初代も大業物、三代も良業物に数えられる。余談だが、新選組初代局長芹沢鴨の愛刀は、正家との説がある。

刀作風は畿内の大和伝の流れをくむとされ、刃部は鎬高くて幅が広く、刃文は主に直刃で、帽子は返りが深いのが特徴とされる。地の肌目の鍛えは、多くが「小杢目に大肌を交えた肌」といわれるが、当館の刀は、木目のような「板目」に見える。肌目とは、刃部の鉄の鍛接した層の接着具合などを表現するとき、「肌目」という表現を用いる。しっかりくっついていてもはっきりと肌が見える場合を「強い」、見えにくい場合に「弱い」、「べっとり」、「ねっとり」、「倒れる」などの言葉で表現する。

刀剣鑑定書の多くには、三原鍛冶の鍛え肌について「小杢目肌に大肌交わる」「小杢目肌に大肌交じり、白けごろがある」と書かれる。鍛え肌の表記については、個人の感覚による部分が多く、板目風を感じる部分を主に受け止めるが、鍛えがつんで杢目風な肌を主に見るかでも、表記に違いが出てくる。当館の作品の多くも、部分的に小杢目と感じられる作品であり、この表記でうなずける作品であるが、大肌が交じると書かれていることから、作品を拝見して、板目に感じられる作品については「板目」と表記することにした。また、焼きの入っていない部分を「平地」または「地」と称する。地の鎬寄りに、息を吹きかけたような白く霞の掛かっているような変化がある作品がある。これがもっとも多く見られ、知られているのは、備前の刀である。そのため、備前刀にみられる変化は「映り」と呼ばれる。この備前刀の移りに似ている変化について、美濃の方にみられる場合は、「白け映り」、三原鍛冶の作品の場合は、「白け」と表現する慣例があるとのことで、ここでは「白け」と表記する。では、帽子が白けるとはどういうことなのか。刀の横手から先端までを切先といい、その刃文を帽子という。切先の部分は横手から下の部分の研ぎとは異なる研ぎ方をする。一般的に砥石で刃物を研ぐと、地の部分は櫛の硬い部分よりも白く見える。刀の場合は、横手から区までの間の地祇は、刃先部分は砥石の色、地の部分は最後の砥石をかけた後で「拭い」という技法で黒く着色し、鎬の部分は「磨き棒」または、磨き用のへらで、きしって光沢をつけている。つまり一般的な砥石の色とは、逆に、刃先が白く、地の部分は黒く見えるように研がれている。一方、切先部分は、切先の膨らみに優しく沿うような薄い砥石をなめる台という台の上に置いて、優しくなでるように研ぐ。子の研ぎを「なるめ」という。つまり、切先部分は、地の部分は着色されていない。砥石を掛けたそのままの色なのである。したがって、横手から区までの地の色に比べて帽子の地の部分は白いのである。

初代正家が活躍した鎌倉時代から南北朝時代までの作を「古三原」、室町時代初期から中期にかけては「中三原」、室町時代末期から戦国時代にかけては「末三原」と呼ぶ。国宝や重要文化財に

指定される作品は古三原に多いとされ、中三原になると徐々に大和伝の作風から離れ、万人好みの無難な作へと変わっていくとされる。末三原のころには戦国時代を迎えて刀の需要が急激に高まり、数打ちの作品が多くなったといわれる。明（当時の中国）でも日本刀の人气が高まり、三原刀も大量に輸出されたようだ。茎の銘に「貝」の字を刻むものがあり、貝派とか貝三原派と呼ばれる。鎌倉時代（元徳の頃）、備後国分寺に助國が古三原によく似た作風で刀作しており、助國の一門は南北朝時代から室町時代前半に兼安、行吉、法華一門等があり、直刀と互の目の刃文を焼くとされる。何故貝三原というのかには、備後国御調郡御調町貝ヶ原（現在の尾道市御調町貝ヶ原）の地名に因むという説や、銘に「備後國三原住貝〇〇」と銘に切る事に因むという説などがあるが、はっきりしたことはわからない。

5 当館所蔵品の紹介

番号は、表1の番号に対応する。

1 短刀 銘「正近」

室町末期の作とされる。

造りは平造り、庵棟、ふくらがやや枯れ気味で、鋭さを感じる。茎は一般で栗尻、鑢目は不明。目釘穴は2つあり区送りをしている。刃渡り20.8cm、反りはない。刃文はのたれに互の目交じりで、帽子で大きくかえる、鍛えは板目で地はしらけがある。

「古刀銘尽大全」⁽⁵⁾によれば、正近は、正家の子・正広の子供で、正家の孫に当たるとされ、「古今銘尽大全」⁽⁶⁾では、正家の三男・正宗の子とされる。「刀匠全集」⁽⁷⁾では、古刀で6人、新刀で1人が挙げられる。



1 短刀 銘「正近」(研ぎ前)⁽⁴⁾

2 短刀 銘「備州三原正光」

室町末期の作とされる。

造りは平造り、庵棟、ふくらつく。茎は一般で栗尻、鑢目は不明で、目釘穴1つ。刃渡り29.6cm、



2 短刀 銘「備州三原正光」

反りはない。刃文は直刀で、帽子で返る。区は焼きだし。鍛えは板目。白けが水かげから立ち上がっているように見える。

「刀匠全集」では、正光も2人の名前が挙げられる。

3 短刀 銘「備後三原住正行作 / 天正十一年八月吉日」

室町時代末期（1583年）の作である。

造りは平造り、刃渡り 27.2 cm、庵棟で、大切先でふくら枯れる。茎は一般形で栗尻、目釘穴は1つで、鑢目は不明。0.1 cmのわずかな反りがある。刃文は直刀調で、帽子で返る。鍛えは板目で地はしらける。

「刀匠全集」では、貝三原とされている。「日本の武具名宝展」の図録によると末三原の一派で、木梨三原の分派とされており、「古刀銘尽大全」では祖を三原正家の弟子正清（貞和年間〔1345〕頃）としているが、正宗とする説もある。三原の前に貝を付ける事から、貝は地名を示すと考え、三原市貝野または尾道市御調町貝ヶ原という説もある。また藤原貝太郎右衛門正奥という銘もあり、貝の意味は不明である。



3 短刀 銘「備後三原住正行作 / 天正十一年八月吉日」（研ぎ前）

4 脇差 銘「正家」

室町時代末期の作とされる。

造りは平造りの庵棟で、切先はふくらつく。茎は一般形で刃上がり栗尻、目釘穴1つで鑢目は勝手下がり。刃渡り 38.8 cm、0.5 cmのわずかな中反り、研ぎの過程がわかるサンプルとして部分研磨を行い、刀身であるところを見ると、刃文は直刀で帽子の返りが深い。地の全容ははっきりしないが、おそらく板目肌で地に白けがあると思われる。

正家は貝三原の代表刀工の一人。同名の刀匠は複数存在するが、いずれも良作、秀作と高評価される。



4 脇差 銘「正家」（研ぎ前）

5 脇差 銘「正清」

室町時代末期の作とされる。

造りは鎗造りで庵棟、鎗は高くない印象で、中切先やや小さめ、ふくら枯れる。茎の形状は一般形で刃上がり栗尻、鑓目不明。目釘穴2つで区送りしている。刃渡りは54.8 cm、反りは1.4 cmと浅い。刃文は直刃だが、姿勢を下げないと刃文が見えにくい。砂流れの二重刃。帽子で小丸、板目肌で地に白けがある。

「刀匠全集」では、備後刀工として5人を挙げている。また、その評価を、優・秀・良・中・並としているが、良作または中作と評価している。



5 脇差 銘「正清」(研ぎ前)

6 脇差 銘「備州三原住人正重作」

江戸時代の作とされる。

造りは鎗造りで庵棟、中切先でふくらつく。茎は一般形で剣形。目釘穴1つ、鑓目は不明。刃渡り54.7 cm、中反りで1.2 cmと浅い。刃文は直刃調で浅くのたれ、互の目交わる。帽子の返り深く、鍛えは板目肌で地はしらけがある。出来はまずまず良い。



6 脇差 銘「備州三原住人正重作」(研ぎ前)

7 脇差 銘「備州三原住貝正近作 / 永禄二年八月日」

室町時代末期の作とされる。

鎗造りで庵棟、鎗高で中切先、茎は一般形で刃上がり栗尻、目釘穴1つ、鑓目は不明。刃渡り47 cm、中反りで0.9 cmと浅い。刃文は中直刃で帽子は丸く返る。姿勢を下げないと刃文が見えにくい。



7 脇差 銘「備州三原住貝正近作 / 永禄二年八月日」(研ぎ前)

鍛えは板目肌で地に白けがある。

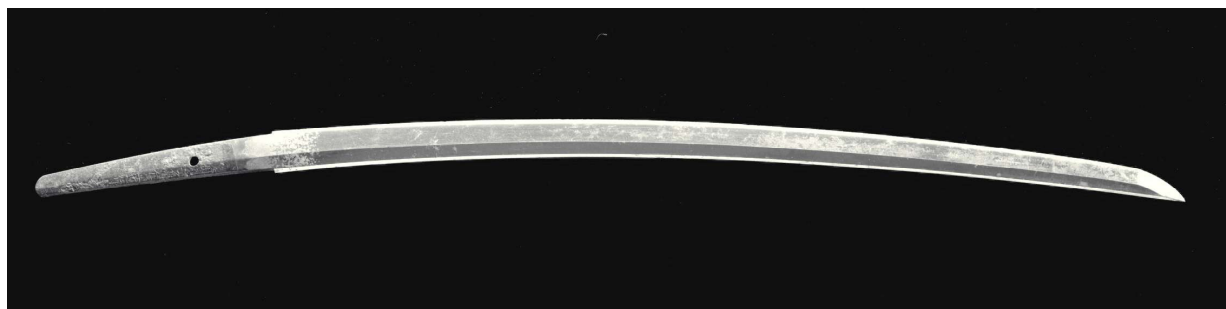
貝三原の代表刀工の一人。同名の者は複数存在するが、いずれも、「刀匠全集」では、良作、秀作と高評価されている。

8 脇差 銘「備州三原住正近作」

室町時代末期の作とされる。

鎬造りで細身だが鎬高、庵棟、小切先でふくら枯れる。刃渡り 56.8 cm、1.8 cm の浅い中反り。茎は細く一般形で刃上がり栗尻、鑓目は不明。目釘穴 1 つ。帽子は焼き詰め、刃文は直刃で、帽子で丸く返る。鍛えは板目肌である。

三原刀の典型的な例で、軽くて細く扱いやすい。「刀匠全集」では、この銘文の正近を天正年間頃に見られるとし、秀作としている。



8 脇差 銘「備州三原住正近作」(研ぎ前)

9 脇差 銘「三原住正家」

室町時代末期の作とされる。

造りは菖蒲造りで棟の重ねは薄い。庵鋒で切先はふくら枯れる。刃渡り 36.3 cm で 2 cm の中反り。茎は一般形の栗尻で、目釘穴は 2 つで区送りしている。鑓目は不明である。刃文は中直刃だが、中央部がのたれる。板目肌で地は白ける。



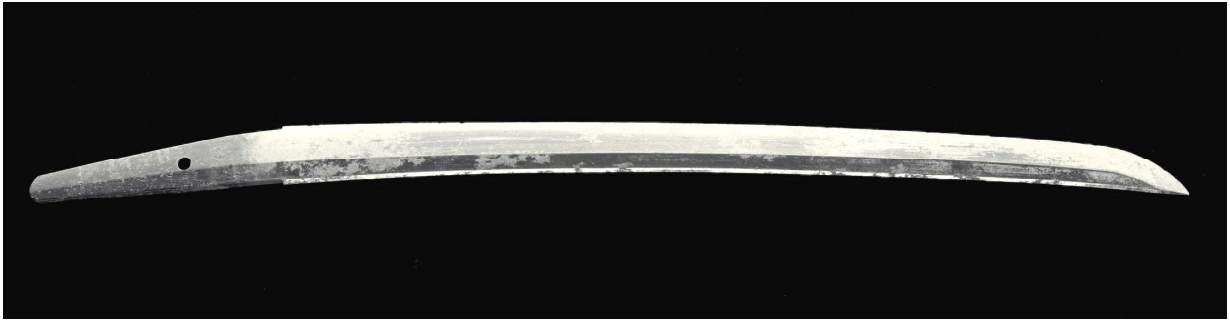
9 脇差 銘「三原住正家」(研ぎ前)

10 脇差 銘「備州三原住正直」

室町時代末期の作とされる。

造りは菖蒲造りで、鎬は薄い。庵鋒、切先はふくらつく。刃渡り 40.4 cm、0.8 cm の浅い腰反り。茎は一般形で切。刃文は直刃調で中央がのたれる。目釘穴 1 つで区送りしている。鑓目は不明である。鍛えは板目肌で地は白けがある。

「刀匠全集」は、木梨三原に一人、不明の三原刀工として一人を上げている。木梨は、南北朝時代以来の杉原氏の本拠地で、御調郡の木梨庄(現・尾道市木ノ庄町)のあたりをいう。尾道の近郊で、尾道の刀工との往来が多かった。「空中齋秘伝書」⁽⁸⁾によると、この派の祖は、政広・正宗とも言い、また「古刀銘尽大全」によれば、三原正家の第三子正信が木梨に移住して起こした一派とされる。

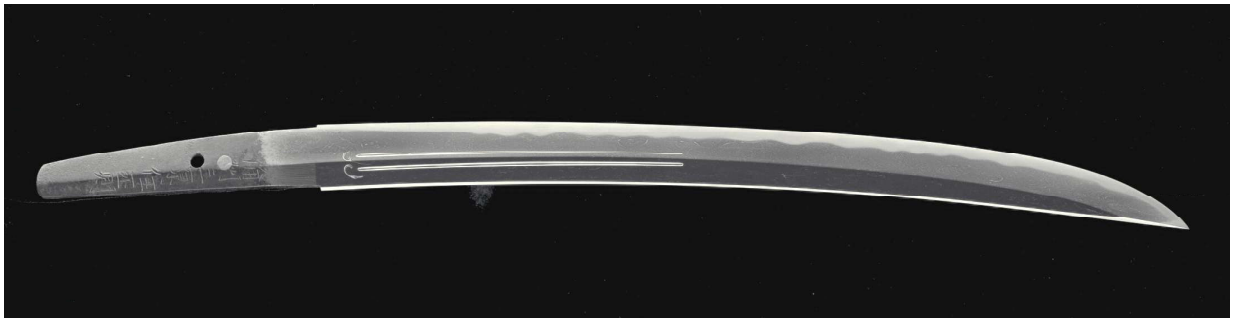


10 脇差 銘「備州三原住正直」(研ぎ前)

11 脇差 銘「備州三原住正則 / 明德元年八月日」

現在は室町時代の作とされているが、「刀匠全集」では、正則を2名上げており、一人は五阿弥正吉の子(文明年間[1469～87])、もう一人は、貝三原の刀工(天文年間[1532～1555])とする。この作品の銘が正真の作とすれば、室町時代初期の作となる。今後研究を要する作品である。

造りは菖蒲造りで細身、庵棟で鎬高、切先はふくら枯れる。刃渡り35.7cm、0.8cmの浅い中反り。両面に不動明王を簡略化した腰樋(日本刀の刀身に彫られる細長い直線の溝、古い樋で愛染明王を表すともいわれる。)短刀「無銘正宗」(名物包丁正宗)のように、両面に二筋ずつはいる。茎は一般形で栗尻、目釘穴1つで、切り目鑢か。区送り。目釘穴2つ、刃部方は金で埋める。刃文はのたれに互の目交じり、小丸帽子。板目肌で地はしらけがある。痛みがひどく、刃表中央上に大きな傷がある。



11 脇差 銘「備州三原住正則 / 明德元年八月日」

12 脇差 銘「正広」

室町時代の作とされる。

平造りで身幅広く庵鋒、切先はふくらつく。刃渡り41.8cm、0.9cmの浅い中反りで、樋を両面に掻く。茎は舟形で栗尻、目釘穴1つで、鑢目は不明。刃文は互の目乱れで、帽子に乱れ込み、帰りが深い。目釘穴1つで区送り。板目肌で、地に白けがある。



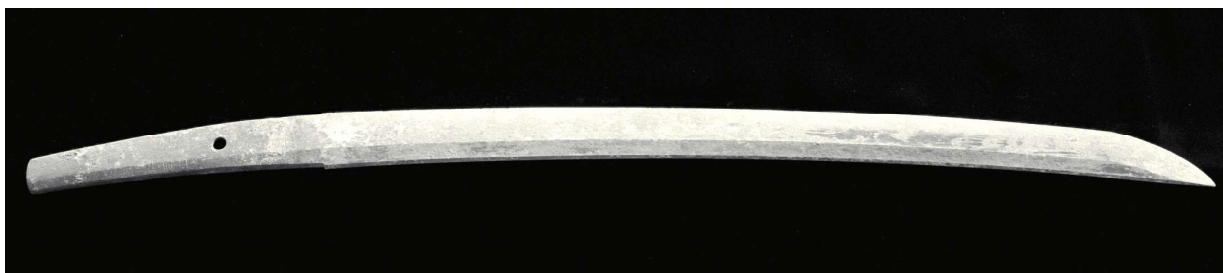
12 脇差 銘「正広」(研ぎ後)

古三原の正広は正家の子とされ、同派中では最も技量の優れた刀工と評される。正広も何代も続いており、応永年間（1394～1428）から永正年間（1504～1521）までの年期が見られる。

13 脇差 銘「正広」

室町時代の作とされる。

鎬造りで鎬は高くなく庵鋒、大切先でふくらつく。刃渡り 43.6 cm、1.0 cmの浅い中反り。茎は一般形で栗尻、目釘穴は1つで、鑢目は不明。刃文は互の目に丁子、帽子は白ける。うつり返りが深い。板目肌で地が白ける。



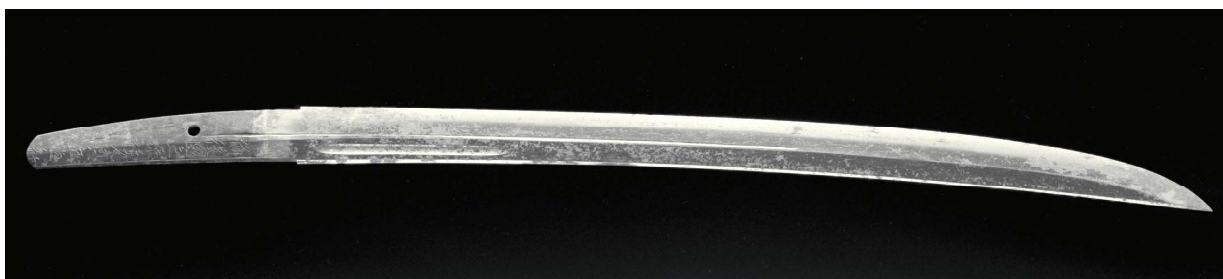
13 脇差 銘「正広」（研ぎ前）

14 脇差 銘「備後国三原住人貝正興作 / 伊丹重俊延」

室町時代末期の作とされる。

菖蒲造りで腰反り、庵棟。刃渡り 44.4 cm、0.9 cmの浅い反り。茎は一般形で刃上がり栗尻、目釘穴1つで、鑢目は不明。板目肌。表に区上丸止めの両チリの腰樋があり、茎中で掻き流しの添え樋の痕跡がみられる。

「刀匠全集」では、4人挙げており、その内、文明年間（1469～87）は、正近の子とされている。また、4人全て良作としている。前出にあるように名前の前に貝を用い、貝は姓のようにも見える。

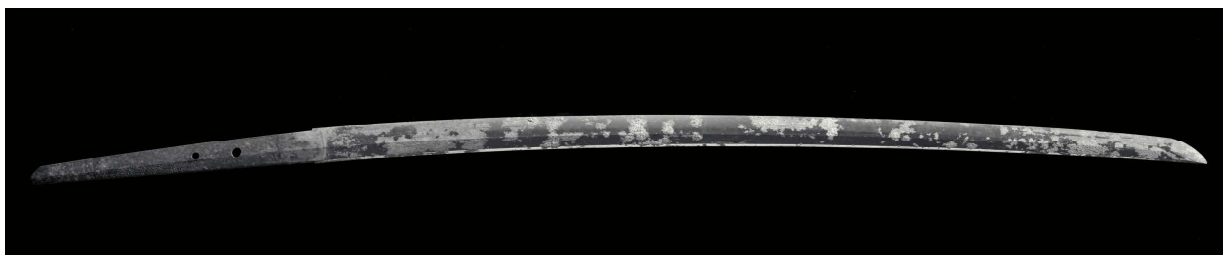


14 脇差 銘「備後国三原住人貝正興作 / 伊丹重俊延」（研ぎ前）

15 刀 銘「藤原重行」

江戸時代の作。

鎬造りで鎬高、切先付近は、鎬低い。小さめの中切先でふくらつく。刃渡り 71.3 cm、1.6 cmの中反りで、茎は一般形で刃上がり栗尻、鑢目不明、目釘穴2つで区送りしている。刃文は互の目で、



15 刀 銘「藤原重行」（研ぎ前）

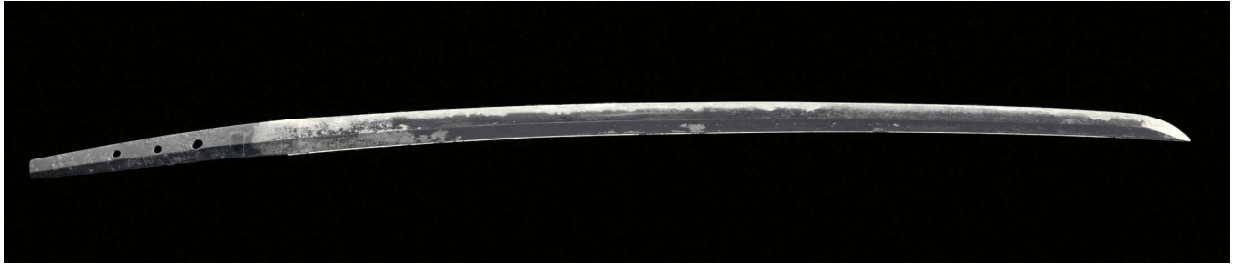
帽子は大丸、返り深い。板目肌で、地は白ける。

16 刀 銘「正近」

室町時代末期の作とされる。

鎬造りで庵棟、小切先でふくらつく。両面に腰樋を搔く。刃渡り 63.6 cm、1.2 cmの中反り。茎は一般形で尻は切、鑢目筋違いか。目釘穴 3 つで区送りしている。刃文はのたれに互の目交じり。板目に杓目で詰む。

「刀匠全集」では、古刀期に 6 人挙げており、いずれの正近か決定できないが、いずれも秀作又は良作とされている。



16 刀 銘「正近」(研ぎ前)

17 刀 銘「備州住定光」

室町時代末期の作とされる。

鎬造りで庵棟、大切先でふくらつく。両面棒樋を 1 筋搔く。刃渡り 76.6 cm、1.6 cmの中反り。茎は一般形で栗尻、鑢目不明で目釘穴 3 つ、区送りをしている。刃文は直刃調で、のたれに互の目交じり。板目肌。

全体が白けており、室町時代末期の三原刀の特徴を考える上で参考になる良作である。



17 刀 銘「備州住定光」(研ぎ前)

18 刀 銘「備後三原住人貞直」

室町時代末期の作とされる。

鎬造りで庵棟、中切先でふくらつく。刃渡り 65.2 cmで 2 cmの中反り。茎は一般形で尻は切、区上げしており目釘穴 3 つで区送り、筋違い鑢目か。のたれに互の目交じり。板目肌で地は白ける。区の上に刃こぼれがある。

焼頭から地に煙り込むような所が見られ、裸焼入れのような映りに近い雰囲気を感じた。又物打ちあたりより上に棟焼が点在し、三原の返りの深い作品という雰囲気も感じられる。

「刀匠全集」では、古刀期に 2 人挙げており、それにはいずれも貝を用いた銘はない。一人は木梨三原とし永正年間(1504～21)頃としており、今一人は永禄年間(1558～70)とする。いずれも中作としている。



18 刀 銘「備後三原住人貞正直」（研ぎ前）

19 刀 銘「備後三原住人貞正興作」

室町時代末期の作とされる。

鎬造りで庵棟、中切先でふくらつく。刃渡り 71.4 cm、1.4 cmの浅い中反り。茎は一般形、入山尻筋違い鑢目か。刃文は直刃で刃裏中央部が互の目、目釘穴一つ、区焼出しで、上手な直刃、小丸、板目肌。地が白けている。返りが深かったが、切先の研ぎにより、返りが細く短くなり、あまり感じられなくなったような気配を感じる。

名前の前に貝を用い、貝は姓のようにも見える。

焼きだしとは、乱れの刃文の場合、区際の刃文が直刃になっていて、急に乱れる場合などに「京焼出し」、焼き幅が穏やかに広がって乱れが始まる場合を「大阪焼きだし」などと、「焼きだし」という言葉を使うが、直刃の場合は、使わない。



19 刀 銘「備後三原住人貞正興作」

20 刀 銘「備州三原住正近作」

室町時代末期の作とされる。

鎬造りで庵鋒、中切先でふくらつく。刃渡り 70.8 cm、1.8 cmと浅い先反り。茎は一般形で剣形、筋違い鑢目か。目釘穴は2つで区送りしている。刃文はのたれに互の目交じり、帽子は白ける。

名前の前に貝を用い、貝は姓のようにも見える。



20 刀 銘「備州三原住正近作」（研ぎ前）

21 刀 銘「備州三原住貝正近作 / 大永六年二月日」

室町時代末期（1526）の作とされる。

鎬造り庵鋒、中切先でふくらつく。刃渡り 66.5 cm、腰反り 2 cm。茎は一般形で剣形、筋違い鑢目か。目釘穴 2 つで区送りしている。刃文は中直刃で大丸。良い直刃を焼いていて、地刃共に冴えて見えた。板目肌で結構詰む。

貝は姓のようにも見えるがはっきりしたことはわからない。



21 刀 銘「備州三原住貝正近作 / 大永六年二月日」

22 刀 銘「備州三原住人藤原貝正興作 / 永禄二年八月吉日」

室町時代末期（1559）の作とされる。

鎬造り庵鋒、中切先でふくらつく。刃渡り 68.8 cm で 2.1 cm の腰反り。茎は一般形で刃上栗尻、筋違い鑢目か。区送りしており目釘穴は 2 つ。刃文は直刃だが、のたれはある。板目肌。刃裏中央上に大きな傷がある。

令和 6 年度の春展では、16 の正近と比較できるように展示したが、正近とは異なり、地金は綺麗に鍛えられているが、刃文が眠くて見えず、その差を感じてもらえると思われる。

前出にあるように名前の前に貝を用い、貝は姓のようにも見える。



22 刀 銘「備州三原住人藤原貝正興作 / 永禄二年八月吉日」（研ぎ前）

23 刀 銘「備後三次住宍戸定広 / 文久三年七月日作之」

江戸時代末期の文久 3 年（1863）作。

鎬造りで庵棟、鎬高で、大切先でふくらつく。刃渡り 69.2 cm、1.6 cm の浅い中反り。茎は一般形で、茎尻は刃上栗尻、筋違い鑢で、目釘穴は 2 つで区送りしている。刃文は中直刃で切先がのたる。帽子白け、大丸。板目肌。直刃の途中で、焼刃土を塗る際に置き直したかのように見える箇所があったが、時代を感じさせる良い刀である。

宍戸定広（1810 ～ 1881・本名宍戸要吉、替名を隼之進）文化 7 年（1810）三次郡櫃田村（現三次市君田町）の生まれ、天保 7 年（1837）に刀工として三次郡西入君村（現・三次市君田町）で独立した。師は不明、一説には城下の輝弘に学んだといわれるが根拠はない。おそらく農鍛冶か

ら自力で刀工を志したものと思われる。腕利きとして藩の御用鍛冶となった。弘化4年(1847)には、大小を藩へ献上した。更に文久元年(1861)には、藩主浅野長訓に、元治元年(1864)7月には、浅野茂勲に大小を献上した。廃刀令以後は農具鍛冶に転じ、明治14年(1881)71才で没し、双三郡君田村西入君の穴戸家墓地に葬られたとされる⁽⁹⁾。



23 刀 銘「備後三次住穴戸定広／文久三年七月日作之」

24 刀 銘「備州尾道住辰房重則作／永正四年八月」

室町時代末期の永正4年(1507)の作。

鎬造りで細い身であり庵鋒で樋を二筋両面に搔く。小切先でふくらつく。刃渡り61.8cm、反り1.8cmと浅い。茎は、一般形で尻は入山、筋違い鎬目。目釘穴は2つで区送りしている。刃文は中直刃。板目肌。やや眠く感じる。刃肉に撚るためかもしれないが、刃にそってしらけを感じた。

「日本の武具名宝展」の図録では、辰房は、古剣書では「トキフサ」または「タツボウ」と呼ばれ、南北朝時代から室町時代末期にかけて、尾道を拠点とした三原派の分派と見られ、辰房三原ともいわれる。由来については「備後住辰房重光」あるいは「備後尾道住辰房守重」「備中国荏(え)原住辰房国重」などと銘に「辰房」を冠するものがあり、辰房は姓か一派の名称のように見られている。また、「古刀銘尽大全」の備後三原系図に重貞を「尾道辰房ト云所住」としており、地名とする説もあるが、現在辰房の地名は伝わっていない。しかし、尾道・三原いずれかに辰房という屋敷があったらしい。南北朝時代の重光を祖としており、重光には、「備州住重光 応安七年十二月日(1374)」銘の短刀がある。しかし、「辰房」を冠する作品は、室町時代のもので、刀・脇差・短刀・槍などが見られ、いずれも鎬高く、鎬幅広い造り込みとなり、地鉄は小板目に柃がかり、ざんぐりするなど、三原ものに共通する作風である。刃文は直刃、あるいは互の目調の乱れで、皆焼風の物も見られるが、あまり上手なものは少ないとされる。



24 刀 銘「備州尾道住辰房重則作／永正四年八月」

25 刀 銘「備後三次住横山祐秀作／元治二年二月」

江戸時代末期の元治2年(1865)の作。

鎬造り庵鋒、猪首風でふくらつく。刃渡り61.8cm、1cmの浅い中反り。茎は一般形で尻は切、

目釘穴一つで、筋違い鑢目か。刃文は互の目に丁子、帽子大丸、板目肌で杳目混ざる。区の上に火を受けたような痕跡がある。一見、室町時代の複式互の目を感じさせる乱れで、匂い口もそろい、上手。地金も綺麗で、新刀時代らしさを感じる。

横山宗左衛門祐秀は、幕末の名工備前長船横山祐永刀匠に教えを受けたと言われている。風雲急を告げる幕末に、藩士に刀剣を制作供給していたと思われる。



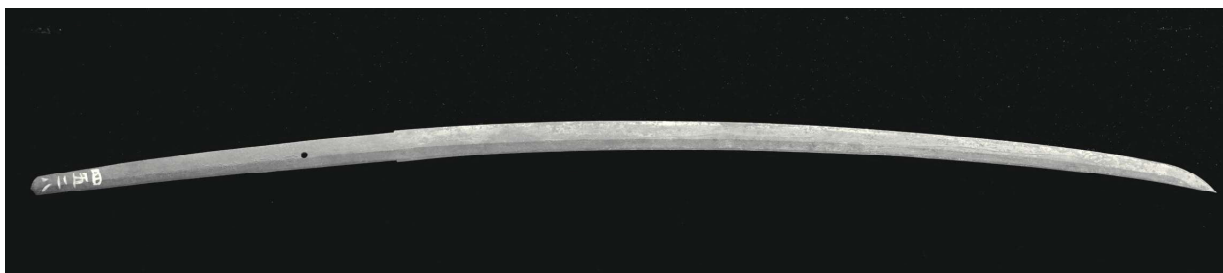
25 刀 銘「備後三次住横山祐秀作／元治二年二月」

26 刀 銘「備之後州芦田郡府中住広瀬隆重作之

／嘉永元年戊申八月吉祥日願主伯州日野郡多里宿川上屋彦次郎」

江戸時代末期とされる。

赤羽刀で最大級の奉納刀。未研ぎ菖蒲造りで庵鋒、南北朝時代、慶長時代の大切先と異なり、先幅が狭く切先が伸びて大切先風となり、ふくら枯れた姿は、幕末特有の鋭利さを感じさせる。刃渡り 137 cm、4.5 cmの腰反り。茎は一般形で切上栗尻、鑢目は不明。現時点で未研磨のため、刃文や肌目の鍛えは不明である。

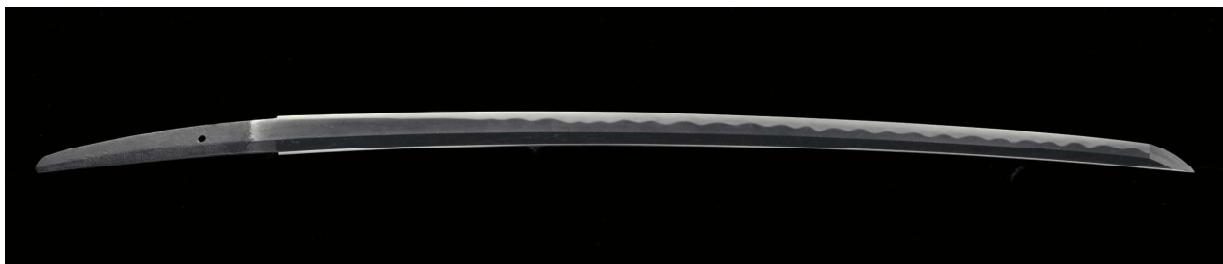


26 刀 銘「備之後州芦田郡府中住広瀬隆重作之／嘉永元年戊申八月吉祥日願主伯州日野郡多里宿川上屋彦次郎」
(研ぎ前)

27 刀 銘「備後国三原住平正房作」

室町時代末期の作とされる。

鎬造りで庵鋒、中切先でふくらつく。刃渡り 68.6 cm、1.4 cmの浅い腰反り。茎は一般形で刃上栗尻、目釘穴は1つで、勝手下り鑢目。刃文は互の目にのたれ、鍛えは板目肌。



27 刀 銘「備後国三原住平正房作」

28 刀 大磨上 無銘 伝青江

無銘だが南北朝時代の作とされ、のちに大磨上げをしている。

鎬造りで庵鋒、先端が広く中切先のび心。二筋樋が両面に搔かれる。刃渡り 74 cm、反りは 2.8 cm の中反りだが、もとは腰反りか。茎は一般形で尻は切、鑢目は不明、目釘穴は 4 つ、大磨上げのため茎に樋筋がはいる。刃文は直刃調で小乱れ、切先は小丸である。板目肌に杓目詰む。研いだことにより、刀表中央に傷が浮き出ている。

狐ヶ崎の映りのような作意を感じさせる映りではなく、白けに近い雰囲気がある。しかし、南北朝時代の身幅が広く切先の伸びた堂々とした姿は、三原の作品とは異なること、直刃調で時代を感じさせる古調な刃文から、青江に極められたのではないかと思う。青江は、備中国（今の倉敷市）にいた刀工集団で平安時代から南北朝時代に活躍した。居住地は、子位荘に居住したと言われているが、倉敷駅の北で、伯備線の東に青江神社があり、近くに金山神社もある。また高梁川を挟んだ向かいに酒津遺跡があるが、高梁川の上流から鉄や砂鉄を運び、酒津で陸揚げしたのではないかという説があり、高梁川の東側にいたのではないかと推測するが、川は、移動することがあるので、定かとは言えない。青江の刀匠は、平安時代～鎌倉時代中期までを古青江、延文時代頃の青江刀匠を末青江、その間を中青江と区別されている。古青江の貞次・恒次・次家は、後鳥羽院の御番鍛冶に選ばれており、高い評価を受けていたようだ。



28 刀 大磨上 無銘 伝青江

6 考察 室町時代末期の三原派の特徴について

当館が所蔵する三原派の作品は、室町時代末期の三原派（末三原）の作品で構成される。造りは鎬造り、平造り、菖蒲造りがあり、鎬高く、あまり反りがない。「樋」と呼ばれる溝を刃の表面に彫ったものや、茎近くの刃を削って刃渡りを短くした「区送り」がみられる。依頼者の要望や体に合わせて、サイズや重さを細かく調整している。刃文はまっすぐな直刃が多い。また三原派の作品は、反りが浅いものが多い印象がある。室町時代末期から、馬上戦から種子島や弓等による銃撃戦の後に集団戦へ戦の様子は変わっていくが、刀を乱戦の中で使用する場合、短く、反りの浅い刀のほうが扱いやすい。その時代の戦闘様式で求められた、性能、使いやすさを考慮して作刀したためと推測できる。

室町時代末期の三原刀の特徴は「白け」である。地に白けがからんで変化が生まれる。特に 18

の正直の作品は、刃文から朝霧が匂い立つような情景の白けがみられる美しい作品である。焼頭から地に煙り込むような所が見られ、焼き刃土を塗らずに焼入れを行う「裸焼入れ」という手法で生じるような映りに近い雰囲気を感じる。又、物打ちあたりより上に棟焼が点在し、三原物の特徴の一つとされる返りの深い雰囲気を表していると感じられる。一方で、22の刀銘「備州三原住人藤原貞正興作／永禄二年八月吉日」は、地金は綺麗に鍛えられているが、刃文が眠くて見えない。比較のため令和6年春の展示では横に21の正近作の刀「備州三原住人貞正近作／大永六年二月日」を展示したので、御覧いただいた方には、よりダークな雰囲気を感じてもらえたと思う。おそらく、21は、焼きを戻して強度を高めていて、実用性を重視した作刀といえる。大工道具等でよく言われることだが、使いやすい道具は、消費されて残りにくい。よく三原派の作品には、名物は少ないとされるが、美術的な美しさよりも、使い勝手の良さを求めた作刀をしており、使われて消耗してしまったためかもしれない。

当館が所蔵する、室町時代末期の末三原派の作品24点を鑑賞しての印象だが、末三原派は、美術品としての「名物」より、丈夫で、帯刀する者の扱い使いやすさ、実用性に重きを置く「業物」を目指して作刀する刀鍛冶集団だったといえそうだ。

なお、「樋」は装飾としての面が大きいとされるが、軽量化の意味もあったのではないかと推測する。三原派の作品に限ったことではないが、大摺り上げを行い、刀身を短くしている28の南北朝時代の無名伝青江は、元の大刀の状態であったら、少なくとも現状より長く重いので、実戦には向かない。そうした点を考慮して二筋の樋を搔いたと推測できる。

7 おわりに

日本刀は、鉄の性質を見極め、本体を造形する刀匠、刃部を美しく研ぐ研ぎ師、鐙などを制作する白銀師等、各分野の職人が、技を尽くして制作される「総合美術品」である。同時に、刀を所有してきた人物や伝承されてきた背景など、「歴史資料」としての価値も併せ持っている。当館に収蔵された赤羽刀は、後に全資料が研ぎ師によって研ぎ上げられ、平成13年度開催の「封印を解かれた名刀一速報！接收刀剣・赤羽刀展一」展で公開され、大きな反響があった。

当館が所蔵する28点の赤羽刀が、今後も日本刀の持つ美術品としての魅力と、文化財の価値を広く県民に知ってもらうために展示・活用していきたい。

注

- (1) 文化庁文化財部美術学芸課『赤羽刀（接收刀剣類）』
- (2) 久保恭子『てのひら手帖 図解 日本の刀剣』（㈱東京美術 2014年）掲載の年表を参考に内容を一部改変して作成。
- (3) 平成13年度「封印を解かれた名刀一速報！接收刀剣・赤羽刀展一」展示資料一覧をもとに作成。
- (4) 写真は当館が平成15年度（2003）に実施したデジタルアーカイブ事業の画像を使用した。
- (5) 『古刀銘尽大全』寛政4年（1792）
- (6) 『古今銘尽大全』元禄7年（1694）
- (7) 清水治編『刀匠全集』美術倶楽部

- (8) 『空中齋秘伝書』 承応 2 年 (1653)
- (9) 広島古文化研究会 『広島藩の新々刀』 平成 7 年 (1995)

参考文献

- (1) 三上貞直編 1985 『鉄の芸術・日本刀を鍛える』 (株)博新館
- (2) 久保恭子 2014 『てのひら手帖 図解 日本の刀剣』 (株)東京美術
- (3) 渡邊妙子・住 麻紀 2014 『日本刀の教科書』 東京堂出版
- (4) 広井雄一 1971 『刀剣のみかた〈技術と流派〉』 第一法規出版(株)
- (5) 臺丸谷政志 2016 『日本刀の科学』 SB クリエイティブ(株)
- (6) 得能一男 2013 『刀工大鑑 太鼓版』 (株)光芸出版
- (7) 柴田光男 1967 『新版日本刀入門 - 選び方買い方 -』 (株)光芸出版
- (8) 得能一男 2007 『日本刀図鑑 保存版』 (株)光芸出版
- (9) 飯田一雄 1968 『わが郷土刀』 (株)光芸出版
- (10) 歴史群像編集部編 2006 『図解 日本刀事典』 (株)学研
- (11) 永山光幹 1979 『刀剣鑑定読本』 (株)青雲書院
- (12) 深井雅海 2018 『刀剣と格付け 徳川将軍家と名工たち』 (株)吉川弘文館
- (13) 柴田光男 1967 『刀装入門 拵と小道具』 (株)光芸出版
- (14) 小田桐道明 2021 『本阿弥名刀秘録』 (株)小学館
- (15) 常石英明 2016 『日本刀の歴史 新刀編』 (株)金園社
- (16) 常石英明 2016 『日本刀の歴史 古刀編』 (株)金園社
- (17) (財)日本美術刀剣保存協会 1998 『入札鑑定同然帳』
- (18) 金子明友 2002 『わざの伝承』 (株)明和出版
- (19) 刀剣春秋編集部監修 2016 『日本刀を嗜む』 ナツメ出版企画(株)
- (20) (財)広島市文化財団広島城編 2007 『特別展 - くろがねの美 - 新刀・新々刀名品展』
- (21) 佐藤寒山 1990 『新・日本名刀 100 選』 (株)秋田書店
- (22) 福永酔剣 1994 『刀工遺跡めぐり三三〇選』 雄山閣出版(株)
- (23) 永宗光幹 1979 『刀剣鑑定読本』 (株)青雲書院
- (24) 大野 正 1980 『技法と作品 研磨彫刻編』 (株)青雲書院

(みかみ こうけい 全日本刀匠会顧問・しまだ ともゆき 当館主任学芸員)